

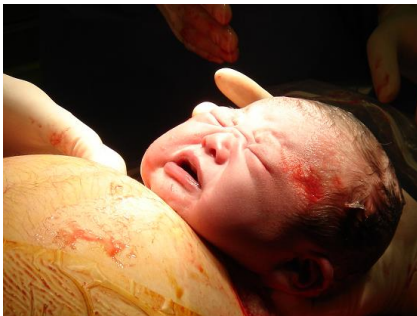
て 帝切の方が産科医早上がり

《帝王切開》

以前 NHK の「あさイチ」という番組で、帝王切開にまつわる誤解、偏見のことが取り上げられていました。「陣痛がなくて楽でよかったね」、「子どもは我慢強くないかもね」など。もちろん帝王切開が楽などということではなく、術中は血圧が乱高下して具合が悪く、術後も創痛、血栓症のリスクなど大変です。帝王切開も命を張った立派な出産です。なお、帝王切開でも赤ちゃんが出てくる感覚はあり、産んだ実感もあると自然分娩と両方を経験された方がおっしゃっていました。

帝王切開については別の誤解もあるようです。「どうして帝王切開してくれなかったんですか」という抗議です。この発言には、帝王切開は大変で医者がかめんどくさくて行わなかったという思い込みが前提になっています。お産が難産となった時に「帝王切開にして下さい」と産婦さんやご家族から懇願された時、「はいそうですか」と言って手術とすれば、産科医にとって実はこんな楽なことはありません。帝王切開は所要時間も30分程で済み、手術としての難易度もさほど高くなく、危険性も車を運転して交通事故を起こす確率程度かそれ以下というのが現場の感覚です。産科医の努力で手術時間が短くなったのをいいことに、保険点数が2万円も下げられたこともかつてありました。

先の難産の場合、帝王切開しなくても大丈夫と判断される場合には、多くの産科医は「必ず産めますから、もう少し頑張らしましょう」と自然分娩を勧めます。それには、その後延々何時間もお付き合いしていく覚悟と、いつでも確実かつ安全に赤ちゃんを出せる鉗子分娩等の技術の裏づけも必要です。しかも、帝王切開するより下から生まれた方が診療報酬も安いのです。産科医がそこまでするのも、ただただ妊婦さんの体のことを思い、女性に不要な傷をつけたくないという一心からです。もちろんいくら安全性の高い手術といっても、安易に多数行われれば中には事故に至る事例もありうるということも考慮しています。



帝王切開で出生した瞬間の赤ちゃんしかめっ面は元気な証拠、唇の色よし

出産は不確実なものであり、経膈分娩には成功したが、赤ちゃんの具合が悪かったということも稀にはありえます。しかし、こうした帝王切開の実情と産科医の苦勞をご理解いただき。結果のみを捕らえて「なぜ帝王切開をしなかったのか」と産科医が責められ、その結果診療が萎縮しますます帝王切開が増えるという悪循環が無くなることを願っています。



帝王切開でもカンガルー・ケア

あ 赤ちゃんの頭を守り出す鉗子

《鉗子分娩》

鉗子(かんし)というものをご存知でしょうか。鉗のような形をした金属製の手術器具ですが、切るものではなく、組織を把持したり牽引するものです。TVの医療ドラマで「コッヘル」なんて言っているコッヘル鉗子が最も有名です。「鉗」という漢字は訓読みで「くびかせ」(これが読めたら間違いなく漢検1級パスでしょう)で、これは昔の刑具で首にはめる鉄の輪のことだそうです。何だか怖いイメージの漢字ですね。

コッヘル鉗子などの手術用鉗子とは別に、出産時に用いる産科鉗子というのがあります。図のように手術用鉗子よりもずっと大きく、



コッヘル鉗子(上)と産科鉗子(下)

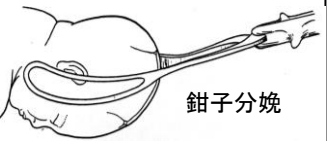
左葉、右葉とよばれる2枚の金属からなります。産科鉗子の先の方の窓状になっている部分はブレードと呼ばれ、

これは赤ちゃんの頭に合うように彎曲しています。左葉、右葉を赤ちゃんの頭の左右に挿入してこれらを合致させると頭が包まれるように保護されます。産科鉗子は横から見ると母体の骨盤の形に沿った彎曲もしており、自然に産道の方向に牽引できるようになっています。強面ですが、赤ちゃんの頭を守りつつ確実に生ませてくれる頼りになる器具です。

産科鉗子と同じ目的に使われる器具に吸引カップがあります。カップに陰圧をかけて赤ちゃんの頭に装着して牽引します。鉗子も吸引も、子宮口が全開大後に赤ちゃんの頭が下がってこなかったり、胎児心音が著しく低下した場合に、分娩を速やかに遂行するために行われます。



吸引分娩



鉗子分娩

当院では、初産婦の7.7%、経産婦の2.2%、全体で5.2%

の出産が吸引か鉗子分娩で、うち3.6%は吸引、1.6%が鉗子でした。母体の骨盤に余裕はあるが胎児心音が悪く早く娩出したい場合には比較的容易な吸引分娩、母体の骨盤が狭く強い牽引力が必要な場合は鉗子分娩と、両者の特徴を活かして使い分けています。

鉗子分娩は吸引分娩に比較して会得するのに修練を要します。若いころには鉗子を得意とする先生に弟子入りして教を請うたものです。鉗子をマスターした若い医師に免許皆伝の証としてマイ・鉗子を贈っている名人先生もいます。先輩方から継承したこの技術を現代の若い先生に伝えるべく、難産の時は手を添えて指導しています。当院で使う「竹岡式」鉗子の持ち手の所には「片手、座位牽引」という心得が記してあります。粗暴に牽引して胎児や母体を傷つけないよう戒めたものですが、達人は座ったまま片手で鉗子を扱い、ヒョイっと生ませることを示しています。この域に達することができるよう勉強は一生続きます。そう言えば、歌手も新人はマイクを両手で、ベテランは片手で持っていますよね。